The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

発趣心（prasthānacitta）の定義をめぐって
——カマラシーラ以降の修行論の展開に関する一考察——

佐藤　晃

1．問題の所在

修行論に関するカマラシーラ（ca. 745–790）の後代への影響力については既に指摘されているが，本稿では菩提心（bodhicitta）の議論に焦点を当て彼以降の修行論に関する思想的展開の一端を明らかにしたい．シャーンティデーヴァ（8c.）は菩提心を誓願心（praṇidhicitta）と発趣心（prasthānacitta）に分類するが，カマラシーラはBhKr I（*Bhāvanākrama I*）で悲，菩提心，実践の3点から成る修行体系を提示する際，菩提心に関してその分類を採用し定義する．本稿では特に発趣心の定義に注目する．なぜならば彼が提示した定義の後代論師達による受容，議論の展開が確認されるからである．以下，まずBhKr Iで提示される発趣心の定義を確認する．次にその受容が見られる，9c.頃に活動したと想定されるジュニャーナキールティのPBhU（*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa*）での議論を検討する．

2．カマラシーラ著BhKr Iにおける発趣心

BhKr Iで提示される修行体系（悲→菩提心→実践）の中で，悲と菩提心の関連性は，第1の菩提心である誓願心の定義において確認される．一方，菩提心と実践との関連性は，次に挙げる第2の菩提心である発趣心の定義において確認される．

> BhKr I 193,3–5（D25a4/P25b4–5）：或るものに基づき，律儀の把持と諸資糧［の収集］に対して向かっている人々が見られる場合，それ（基づくところのもの）が発趣心である．

この定義によれば，発趣心とは修行者達が律儀の把持や諸資糧の収集に対して邁進する際の拠り所になる心と理解される．定義中の律儀や諸資糧は実践に関するものなので，修行体系上での菩提心（発趣心）と実践との関連性が提示されていると考えられる．BhKr Iにおいて実践は智慧と方便を内容とするので，発趣心における実践との関連性とはそれら2つの実践との関連性を意味する．しかしBhKr Iは上記定義中の律儀や諸資糧について説明しないため，その関連性は必ずしも

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

明確ではない．つまり少なくとも2通りの解釈が可能である．第1は，諸資糧を福知の二資糧と理解し，発趣心と方便・智慧の両実践との関連性が示されるとする解釈である（Cf. BhKr I 221,3–4; BhKr II 3,19–23）．第2は，諸資糧を止と観の各資糧と理解し，発趣心と智慧のみとの関連性が示されるとする解釈である（Cf. BhKr II 21,13–25,6）．しかし上記箇所でいずれが妥当であるかは判断できない．

3．ジュニャーナキールティ著 PBhU における発趣心[1)]

ジュニャーナキールティの PBhU は波羅蜜乗の修行体系を纏めた綱要書であるが，そこで提示される修行体系は，BhKr I と同様，悲，菩提心，実践の3点から成る．しかし，菩提心の理解に関しては BhKr I との共通点のみならず相違点も確認される．共通点は菩提心を誓願心と発趣心に分類する点である．一方，相違点はそれら2種の菩提心をさらに22種に分類し議論を展開する点である．特に各菩提心を修行階梯に対応付ける点は BhKr I には無い特徴的な議論である．

3．1．PBhU における菩提心に関する理解の枠組み —菩提心の分類と修行階梯—

PBhU において菩提心は誓願心と発趣心とに分類され，さらに前者は3種に，後者は19種に分類される．各菩提心は特定の事柄との結び付きに基づき区別され（See PBhU D73a4–73b5/P[1]79a7–80a1/P[2]196a2–196b4），各々修行階梯に対応付けられる．まず3種の誓願心は資糧道に，19種の発趣心のうち第1の加行と結び付く発趣心は信解行地（加行道）に，第2から第11までの十波羅蜜と結び付く発趣心は因位に，そして第12の神通と結び付く発趣心から第19の法身と結び付く発趣心までの8種は果位に対応付けられる（See PBhU D73a7–73b5/P[1]79b2–80a1/P[2]196a4–196b4）．なお菩提心を分類する際，AA（*Abhisamayālaṃkāra*）I.19–20 が典拠とされる（See PBhU D73a7–73b1/P[1]79b2–3/P[2]196a5–6）．また各菩提心を修行階梯に対応付ける議論はハリバドラの AAĀ（*Abhisamayālaṃkārāloka* ad AA I.19–20）を踏襲したものと考えられる．

3．2．発趣心の定義 —「菩提心の修習」と「方便・智慧の併修」の関連付け—

19種の発趣心の最後は法身と結び付いたもの（*dharmakāyasahagata）であり，AAĀ によれば修行者の最終目的である仏地に収められる（Cf. AAĀ 26,23–25）．この理解によれば PBhU は修行論を菩提心の議論の中で完結させようとする意図を持ち，また菩提心の修習を仏地到達の原因と見做していると言える（Cf. PBhU D73a1–2/P[1]79a3–4/P[2]195b6–7）．一方，その原因として方便・智慧の併修も指摘される（See PBhU D73a1/P[1]79a2–3/P[2]195b5–6）．よって PBhU では菩提心の修習と方便・智慧の併

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

修の両者が仏地到達の原因と見做されていると言える．この場合，この2つの見解は何らかの形で関連付けられるべきだと考えられるが，その際次の発趣心の定義が一定の役割を担っていると考えられる．

> PBhU D74a1/P[1]80a4–5/P[2]196b7–8: 発趣を相とする［心］とは，［修行者が］或るものに基づき（gang nas brtsams te, *yataḥ prabhṛti），律儀の把持を先として，布施等の資糧（sbyin pa la sogs pa'i tshogs pa, *dānādisaṃbhāra）［の獲得］に対して向かう場合，［その基づくところのものが］発趣心である．

この定義によれば，発趣心とは修行者が布施等の資糧の収集に対して邁進する際の拠り所になる心と理解される．これがBhKr Iで提示された定義を踏襲していることは明らかである．しかしBhKr Iの定義では資糧に関する説明が無かったのに対し，PBhUではその内容が布施等に限定されている点は注意されるべきである．布施等は智慧によってはじめて完成し方便と成ることが可能となる（See PBhU D74a2–3/P[1]80a6–7/P[2]197a1–3）とされるので，資糧に関するこの「布施等」という限定により，発趣心は，方便と智慧の2つの実践のうち，方便との関連付けが意図されていると考えられる．

以上の内容を踏まえ，PBhUにおいて仏地到達の原因と見做され得る，菩提心の修習と方便・智慧の併修という2つの見解の関連性は次のように理解される．まず上記発趣心の定義（いずれ方便と成る布施等の資糧を収集すべく邁進する際の拠り所となる心）から上記2つの見解の関連性の一部，つまり菩提心の修習と方便との関連性が確認される．一方，智慧は布施等における方便としての在り方を決定する原因として位置付けられるが，このことから智慧と菩提心の修習の関連性は方便を介して理解される間接的なものであると指摘できる．

また，布施等は智慧により地（*bhūmi）に成ると指摘される（See PBhU D74a2/P[1]80a6/P[2]197a1）．このことから，布施等は十波羅蜜中の智慧波羅蜜を除く九波羅蜜を指していると考えられる．十波羅蜜はそれぞれ，19種ある発趣心の内の第2から第11までに関連付けられる．そして，それら10種の発趣心は修行階梯上では因位に位置付けられる．よって，PBhUは十波羅蜜を方便（布施等の九波羅蜜）と智慧から成る実践として因位に位置付けていると考えられる．

4．結論

本稿ではカマラシーラ以降の修行論に関する思想的展開の一端を明らかにするため，BhKr Iに提示される発趣心の定義に焦点を当て，その議論を踏襲したと考

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

えられるジュニャーナキールティのPBhUにおける議論を検討した．両者の相違点は菩提心の理解の枠組みにおいて確認される．つまりBhKr Iは菩提心を誓願心と発趣心に分類するのに対して，PBhUはそれをさらに3種の誓願心と19種の発趣心に分類した上で各々初習業地から仏地までの修行階梯に対応付ける．PBhUは修行論を菩提心の議論の中で完結させようという意図を持ち，方便・智慧の併修とともに菩提心の修習を仏地到達の原因として理解している．そしてこの2つの見解の関連付けにおいて，BhKr Iで提示された発趣心の定義が一部改変された上で活用されている．なお，カマラシーラ以降，修行論を菩提心の議論で完結させようとする傾向が盛んになったとされる[2)]．

1）ジュニャーナキールティの年代等に関して佐藤［2012］参照．　2）菩提心修習論書と言われる一群の文献群がそれに当たるとされる．Cf. 生井［1989］．なおこのPBhUと同様，BhKr Iの修行論を踏襲するものにサハジャヴァジュラ（11c.）のTDṬ（*Tattvadaśakaṭīkā*）がある．TDṬにおける発趣心と2種の実践との関連付けには，PBhUとの若干の相違が確認される．Cf. 岩田［2012（刊行予定）］．

〈略号及び参考文献〉

AA：*Abhisamayālaṃkāra*（Maitreya）. AAĀ：*Abhisamayālaṃkārāloka*（Haribhadra）, ed. U. Wogihara, 1932, 東洋文庫. BhKr I：*Bhāvanākrama I*（Kamalaśīla）, ed. G. Tucci, Roma：Is. M. E. O. 1958. BhKr II：*Bhāvanākrama II*（Kamalaśīla）, ed. K. Goshima, 1983. PBhU：*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa*（Jñānakīrti）, D3922/P[1]5317/P[2]5456. TDṬ：*Tattvadaśakaṭīkā*（Sahajavajra）, D2254/P3099. 一郷正道［2011］：『瑜伽行中観派の修道論の解明―『修習次第』の研究―』2008–2010年度科研費成果報告書．岩田孝［2012（刊行予定）］：「サハジャヴァジュラの波羅蜜理趣での修習論『真実十頌釈』（Tattvadaśakaṭīkā）和訳研究（ad TD5d–6）」『伊藤瑞叡博士古稀記念論集』所収．佐藤晃［2012］：「カマラシーラ以降の修行論における菩提心の定義に関する一考察」『久遠研究論文集』（早稲田大学仏教青年会）第3輯．生井智紹［1989］：「仏道の体系と瑜伽の階梯―〈菩提心修習〉に関連して―」『仏道の体系』（日本仏教学会）所収．

〈キーワード〉 prasthānacitta, bodhicitta, Kamalaśīla, *Bhāvanākrama I*, Jñānakīrti, *Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa*

（早稲田大学大学院）

NII-Electronic Library Service